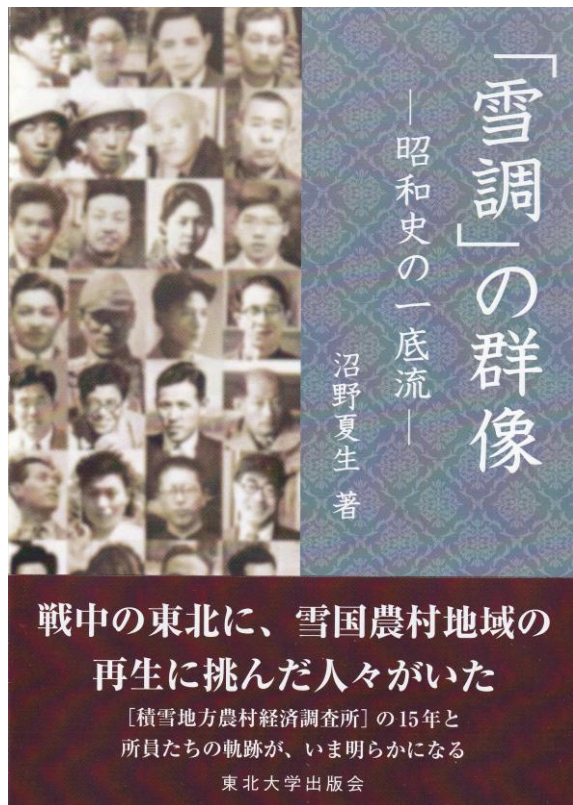


# 「雪調」の群像 —昭和史の一底流—

沼野夏生 著  
東北大学出版会 刊

表紙



## 内容組見本

### 第八章 それぞれの戦後



岩手県農業試験場長時代の  
山崎正

(『滝沢三十四年間の思い出』より)

柴田仁が『私の昭和史』に手記を寄せたのは、役人人生をつつがなく終えて一〇年以上が経った後だった。彼はそのなかで、特高に検挙された四人のうち、小池と山崎をそれぞれ「大池」「川崎」と呼んで登場させている。石田とは雪調での接点はなかった。彼ら三人と互いに面倒を見合うような関係は柴田にはなかったが、ずつと気にかかっていた人々だったことは間違いない。ひとり娘を病気で失い、老妻とふたりだけの余生のなかで、置き忘れたものを活字にした柴田は、その翌年静かに七十七年の生涯を閉じた。

#### 【山崎正】

小池や柴田から七か月後に検挙された山崎正に関しては、第六章で述べたとおり検挙後に関する記録がほとんどなく、起訴されたかどうかともわかっていない。少なくとも、雪調の職員として復帰することはなく、失職したことは確実である。しかしその後戦後にかけて、山崎がどうしていたかは、本人が何も書き残していないこともあり、まだわかっていない。

山崎正の名が次に確認できたのは、東北農業試験場経営部の職員としてであった。のちに試験場の三〇周年記念誌に寄稿された自身の文から、就職は一九五三(昭和二八)年四月とわかるが、その前のことは書いていない。小池保の長女の典子さんによれば、小池は生前、岩手県庁に勤めて自分の立場をそれなりに築けたので、試験場ではどうかと山崎を誘ったと話していたそうである。そうであれば、小池と山崎も連絡を取り合っていたことになる。小池が世話を焼いたことから、山崎の戦後が動き出した。石田、小池、山崎の人脈がここにつながったの

を聞かされた。手記には、その後砂田に会いに行つたときのこと、淡々とした、しかしやり場のない空しさを滲ませた筆致で書かれている。

柴田は一九五〇(昭和二五)年に経済安定本部天然資源局農業課に採用され、翌年農林省に復職した。その後は農林統計調査の分野を歩み、統計調査部調整課課長補佐・外国統計渉外翻訳班長、統計分析班長、農林大臣官房調査課、統計調査部管理課統計指導官などを歴任した。原口健樹と同時期に農林省の課長補佐になっていたが、配属されたのが食糧の管理や統制という生々しい分野ではなく、統計的な調査分析という世間の喧噪とは縁の薄い分野であったことが幸いしたとも思える。

統計調査部の仕事は柴田にとって性に合ったものだったようで、仕事をこなすかたわら、外部に向けて統計に関する所論や主張を積極的に表明している。たとえば渡辺兵力が一九六三(昭和三八)年の『朝日ジャーナル』三月一七日号に発表した論説に対して、統計利用上の誤りを同誌に投稿し批判している。柴田と渡辺は奇しくも一九三九年に短期間だけ同時に雪調に在籍した間柄だが、転出や応召があったため一緒に仕事をしたことはなかった。柴田はまた、一九五七年に農林省統計調査部により編集・出版された『日本の農業経済』では主要執筆者のひとりとなり、農業・農家の基礎的統計や農業資材市場などについて論じている。

晩年の柴田は、その人生をどのように振り返っていたのだろうか。手記の最後は、次のように締めくくられていた。

私にとつての昭和史は、敗戦前は暗黒である。敗戦後の一時期は明るかった。それともつかの間の明るさであった。年とともに暗くなりつつある。再び明るさを取り戻す見込みはなさそうである